

「奇跡の舞台」から気仙沼みなと祭りへ

劇団「夢創」 団長 久米良久さん（横見町）

8月10日夜、劇団「夢創」の子どもたちと保護者、スタッフ総勢40人を乗せたバスは阿南市文化会館を出発した。震災後初めて開催される気仙沼みなと祭り「港・けんぬま復活祭」に参加するためだ。

昨年8月、子どもたちに「夢と勇気を与えることが気仙沼復興の力になる」との思いから、気仙沼演劇塾「うを座」の皆さんを迎え、「気仙沼復興支援合同ミュージカル・夢つむぎの詩2011」を公演。多くの皆さまからご支援をいただいた。「奇跡の舞台」だと「うを座」の鈴木恒子座長は言った。そして、「夢創の子どもたちを被災地へ連れて行きたい」との思いを強くし、1年後にそれを実現することができた。

高速道路の渋滞は激しく、気仙沼に到着したのは出発してから19時間後のことだった。子どもたちは疲れた様子も見せず、早速、「はまらいんや踊り」の合同練習に就いた。夜、気仙沼湾で祭りのセレモニー、鎮魂と復興への思いを込めた荘厳な花火、そして震災で亡くなった方々の冥福を祈



る灯笼流しに立ち会い、御霊安らかにと手を合わせた。

11日の夜は大船渡市で宿泊。ホテルは大船渡湾に面し津波で3階まで浸水したが、自力で営業を再開していた。周囲は津波で流されて何もなかったが、仮設店舗の明かりが暗闇の中で輝いていた。

12日朝、被災地の状況が眼前に広がった。陸前高田の7万本の松が流された地に立つ「奇跡の一本松」、気仙沼の住宅の土台の上に悠然と居座る大型巻き網船には強い衝撃とともに多くの思いが駆け巡った。子どもたちの心にも深く刻まれ、レポートに次のように綴っている。「この松は、家族や知人を亡くした人と同じ気持ちだと思ふ。でも、前向きに頑張っているように

見えた。とても感動した。」(小6)

「うを座」と「夢創」合同チームは、約500メートルの距離を40余りのグループが2時間余り踊り続ける「はまらいんや踊り」で、阿波踊りの動きを取り入れたダイナミックな踊りを披露。ひと際観客の目を引き付けていた。「一緒に元気になるうって思つて気仙沼に来たけど、私の方が何倍も元気やパワーをもらった。どうして被災地の皆が強いかわからなかったけど、人間ってはおかなくて大切な人がいるから強いのかなつて思つた。」(中3)

交流会後、2軒のホテルに分泊し、13日の朝、気仙沼を後にした。大雨に見舞われながら阿南に帰着したのは14日の午前2時半であった。「徳島に帰つてくると、以前と変わらない平穏な日常がありました。今まで当たり前前に思えた毎日がとても大切な毎日に思えてきた。」(高一)

今回の旅で、子どもたちは多くのことを学んだ。そして10月、「気仙沼復興支援あなん市民ミュージカル・夢見竹のかくれんぼ」で成長した姿を見せてくれた。子どもたちにとつて、未来とは「すぐそこにあるもの」だろう。その未来が、夢と勇気と感動で満ち溢れていてほしいと願う。そして、「今」を「未来」を生きる子どもたちのためにも、何らかの形で復興支援を続けていきたいと思つている。

